

研 究 研 修 部 だ よ り

テーマ別研修

視機能評価について

2025年2月5日（水）にテーマ別研修「視機能評価について」を実施しました。講師は視覚支援センターの先生方をお願いしました。講義形式ではなく、実際に検査器具〔ランドルト環、絵指標、TAC、森実式ドットカード、バタフライステレオテスト、ラングステレオテスト、色の識別の困難さを体験するメガネ（バリエーション）〕に触れながら解説していただきました。



参加者アンケートより

・異動してすぐの頃も研修を受けるが、実際に生徒に関わって少し経ってからの方が研修の内容もより理解できると感じた。

・生徒が検査を受けるのを隣で見るのと、実際に手にとって体験してみるのとでは違うなと感じた。

盲ろう児教育に関する研究報告会

基調講演（講師：福島 智氏）

障害のない人と盲ろう児の間に立つ「中途盲ろう者」としての体験から思うこと

2025年2月7日（金）にハイブリッド形式で「盲ろう児教育に関する研究報告会」が行われました。以下、基調講演の内容を掲載します。

テレビ画面の映像が消えた状態、音声が消えた状態、映像と音声が消えた状態を想像してみよう。視覚障害者と健常者とのギャップも大きいですが、盲ろうとのギャップは無限。盲ろうの世界は暗くて静か。宇宙飛行士のようなもの。

盲ろうの困難の特徴は、他者との認知的ギャップとタイムラグ。見えている人が感じるその場の環境と盲ろう者が感じる環境は異なるが、違いは本人も周囲も分からない。

高等部生の時、盲ろう者同士でトランプをしたが、ゲームはできるのに面白くなかった。リアルタイムでコミュニケーションをサポートしてくれる通訳者の方が一緒にゲームをして、周囲の環境を伝えてもらえると楽しめるようになった。トランプそのものではなく、語り合うこと、言葉を掛け合うこと、やりとりすることが楽しかった。これがコミュニケーションの本質だと感じた。

盲ろう者のコミュニケーションにはどうしても時間がかかる。時間の流れ方が違う。指点字というコミュニケーション方法をとっていても、誰かがやってきてしばらく話して去って行く、また別の誰かがやってきて話したいことだけ話して去って行くような、周囲の都合で断続的に話しかけられるだけでは宇宙空間に放り出されるのと同じ。持続的に安定してコミュニケーションをとることが当たり前になるべき。

盲ろう者の周囲にいる人は、本人が見えていない・聞こえていないのではないかと、思うことからスタートして欲しい。